

それでは、マタイの福音書 14 章 22 節から 33 節を通してお読みいたします。『²²それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰してしまわれた。²³ 群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。²⁴ しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、風が向かい風なので、波に悩まされていた。²⁵ すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。²⁶ 弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ。」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。²⁷ しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。²⁸ すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」²⁹ イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。³⁰ ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。³¹ そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」³² そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。³³ そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、「確かにあなたは神の子です。」と言った。』今お読みした箇所は、ここ以外にもヨハネの福音書の 6 章、並びにマルコの福音書の 6 章にも同じ記事が並行記事として記録されていますので、是非今日お家に帰った後、特に並行記事のマルコの福音書の 6 章、そしてヨハネの福音書の 6 章から同じ記事が記録されていますが、少し見方も違いますし、記述にも少し違いがありますので、そうしたところをチェックしながら、比較しながら読んで理解を深めていただければと思います。

で、早速今お読みしたところの中から、いくつかお分かちしていきたいと思います。今イエスは弟子たちを船に乗せて向こう岸へ行かせようされます。で、“強いて”という言葉が 22 節にあります。日本語で“強いて”と言いますと、それは相手が望まないことを無理にさせるという意味合いで使われます。弟子たちは 12 人ここにいますけれども、その 12 人のうちの半分以上はこのガリラヤ湖で漁師をして生活を営んでいる者たちです。夕方になってどうも嵐の兆候が見えるようだ。でも主は向こう岸へ行きなさいと、この弟子たちに強いて命令されます。まあ、彼らは特別文句も不満も漏らさずに、このイエスの命令に即従います。で、その間イエスはひとりで山に退かれて祈っておられます。彼らが乗り込んだボートというのは、実は 1986 年にガリラヤ湖の北西で泥の中から 2000 年前の、日本で言えば弥生時代のボートが発見されました。イエスの時代と同じものです。で、それは古代ガリラヤボートと呼ばれるもので、長さが 7.2 メートル、横幅が 2.1 メートルという大きさです。大体弟子たちが乗り込んだ船と同じ大きさだと想像して欲しいと思います。弟子たちの時代の、2000 年前の、1 世紀の時代のボートが泥の中から 1986 年に見つかったわけです。で、ガリラヤ湖の北西で見つかったと言いますが、その北西というのはまさに弟子たちが向こう岸として向かった場所でもあります。今北西に向かおうとしている。そこはゲネサレという所なんです。その泥の中からボートが見つかりました。今お読みしたように、もしイエスが嵐の真っ只中に現れなかったら、弟子たちはひよっとしたらそのままガリラヤ湖の藻屑となって、船と一緒に白骨死体として今世紀に見つかったのかもしれない。まあ、いずれしましても、弟子たちはプロの漁師でガリラヤ湖を自分たちの庭のように、まさにそこは自分たちの職場です。自分たちのお店です。自分たちのデスクであります。そこで起こること、それは弟子たちが容易に想像がつくことで、嵐の兆候も彼らはプロですから知ることが出来ます。で、ちなみにここで言われている向かい風というのは、どの程度の風

なのか。皆さんにも少しお分ちしたいと思いますが、それは地中海から吹いてくる向かい風、逆風であります。旋風つむじかぜのような下から上へと、また四方八方へと吹きまくる暴風雨であります。ガリラヤ湖というのは、実は海拔下 213 メートルのところにあります。海拔下というのは近くにある地中海よりも 213 メートルも低い -213 メートルというところにガリラヤ湖があります。世界で 1 番海拔が低いところというのは、実は死海というところですよ。海拔下 418 m です。でもガリラヤ湖も海拔下 213 メートルというところにあります。で、周りは大体 1,000 メートル級の山々に囲まれております。ですから丁度すり鉢状の盆地のような格好です。で、そこへ山の冷えた空気が夕方になると降りてくるわけです。で、同時に地中海の方から暖かく湿った空気がやってきて、それらがぶつかるわけです。まあ、丁度台風のような状態に陥るわけです。その風というものは恐ろしく強いもので、実際に大荒れになって、大雨も伴うことがよく知られております。まあ、そんな兆候を弟子たちは知らないはずがありません。彼らは大半は漁師でした。しかもガリラヤ湖が彼らの職場でしたから、そんな恐ろしい嵐が近づいている。それが分かっているにもイエスは敢えて彼らに「向こう岸へ行きなさい。」と夕方の時間帯にお命じになりました。で、実際に彼らは従って、陸から何キロメートルも漕いで行ったわけです。ただ何キロメートルと言うのは、具体的にどの程度の距離かということ、ここには書いてありませんが、同じこの物語を記録している並行記事のヨハネの福音書の 6 章 19 節というところによりますと、同じ記事が記録されていて、そこでは（『こうして、四、五キロメートルほどこぎ出したころ、彼らは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、恐れた。』）四、五キロメートル漕いだというふうに。記録されています。何 km かということがヨハネの 6 章の方では、四、五キロメートルと記録されています。夕方に彼らは岸を出発しました。夕方というのは丁度 6 時の時間です。イスラエルで夕方・日没というのは 6 時です。で、6 時に出発して今四、五キロメートル進んだところです。時間はどれぐらい経ったか。夜中の 3 時頃だとマタイの福音書の方で、24 節でお読みしました。で、この“夜中の 3 時頃”というのは、皆さんの新改訳聖書ですと小さな*印がついていて欄外を見ていただくと“直訳「第四の夜回り」”とあります。「第四の夜回り」というのは、正確には午前 3 時から午前 6 時までの時間帯です。ですから夜中の 3 時といっても、少しスパンがあります。夜中の 3 時から明け方の 6 時までの時間のことを「第四の夜回り」と言います。その時間帯にイエスが嵐の中で彼らに近づいて来られました。しかもイエスは船には乗っておりません。イエスは荒れた湖面を歩いて来られました。で、今頭の中でちょっとイメージして頂きたいのですが、夕方の 6 時に出発して、まだ四、五キロメートルしか進んでいない。彼らは向かい風に悩まされながら、漕ぎあぐねていたわけです。早くても午前 3 時です。夕方 6 時に出発して午前 3 時です。時間が計算出来たでしょうか。どのくらいのスピードで彼らが進んだのかは、容易に計算が出来ると思います。ですから実際にプロの漁師で、彼らは「もう無茶な話であると。これは無謀な話であると。嵐も来てるし、もしかしたらとてもじゃないけれども岸辺にたどりつかないかもしれない。」もう少なくとも 9 時間経っています。場合によっては 12 時間かけて進んでいるかもしれません。9 時間から 12 時間かけて四、五キロメートルしか進めない。時速で言えば 1 時間に 400 メートルとか 500 メートル。100 メートルを 15 分で進むようなものです。たぶん皆さんであれば 100 メートルを 15 秒ぐらいで走りますか？ 15 分はかからないと思います。彼らは 100 メートルを 15 分もかけて進んでいたわけです。疲労困憊に加えて苛立ちも襲ってきていると思います。全く前進しない。一生懸命頑張っているのに、漕いでいるのに、努力しているのに前に進まない。私たちの信仰生活にちょっと似ているかもしれません。一生懸命聖書を読んでいるのに、一生懸命祈っているのに、一生懸命教会で奉仕をしているのに、全然クリスチャンとして進歩がない。何も変わっていないようだ。自分自身に苛立ち、疲れてくるかもしれません。で、彼らは波に悩まされておりました。実際に途中で引き返すというオプションもあったと思います。このままではとても岸にはたどりつかないと。この暴風雨では湖の真ん中で転覆してしまうかもしれない。死んでしまうかもしれない。危ないから戻ろうと、そういう

選択肢もあったと思います。イエスが言われた命令は、“強いて”ということで、これは完全なる命令でありまして、彼らにしてみればまったくもって非常識な、まったくもって無謀な命令でしか聞こえなかったと思います。漁師の豊富な経験と漁師の常識に従えば、とても無理難題な話だったと思います。でも、そうと知っていながらも彼らはイエスに信頼して、「イエスの言われることならば信じて行ってみよう。従ってみよう。」と決心したわけです。で、途中で引き返すこともなく、彼らは従い通そうとしました。常識や経験だけで判断しなかったんです。神様はもちろん私たちにも、常識・経験というものをお与えになって、私たちに正しい判断を下すように、そういう常識も経験も与えて下さっておりますけども、時に神様は私たちの常識や経験を超えたことを強いてお命じになります。で、その時には、主に従うように、信頼するようというのを私たちにも促しておられます。イエス・キリストは何も分からずに、ただの大工の息子として、ただの聖書を教える律法学者として、ガリラヤ湖の天候なども何も知らないで命令されたのではありません。イエス・キリストは神の子です。ガリラヤ湖を造られたお方です。地球を造られたお方、全宇宙を造られたお方ですから、この方がお命じなる時、それは全てを把握した上での、すべてをコントロールした上での話でありますので、私たちのちっぽけな頭の中で思いつくところの判断または思いつきやアイデア、そうしたものを優先させるよりも、むしろ私たち以上に大きな方ですべてを知っておられる方、永遠なる方にお任せをして、この方の言われることに従う方ははるかに賢明だということを皆さんにもお伝えしておきたいと思います。

でも、そんな彼らではありましたが、夜中の3時頃、湖の上を何者かが自分たちの方に近づいてくる。これはもちろん常識では、生身の人間とは思わないわけです。人の姿をしているとすれば、それはもう幽霊でしかないと彼らは思って、大の男たちが恐ろしさのあまり絶叫しました。「幽霊だ。」と、ガリラヤ湖の屈強な漁師たちがもう恐れて怯えてしまっています。まあ、夜中の3時頃といえば丑三つ時です。実際に一番暗い時間帯で幽霊が出そうな時間です。真っ暗闇です。しかも、嵐で死の危険を感じているところに、そんな得体の知れないものが自分たちに近づいてくる。「もうこれで終わった。」と。まあ、そのように彼らは思ったのかもしれませんが。でも、イエスは彼らのことをしっかりと見ておりました。イエスには全てが見えています。たとえ真っ暗闇でも、たとえ暴風雨が吹きまくる嵐のただ中にあっても、イエスはあなたのことを見えています。人生の嵐においてあなたが漕ぎあぐねている、苦しんでいる、悩んでいる。その姿をイエス・キリストは全て見ておられます。

そして同じくこの記事の並行記事としてマルコの福音書の6章の方にも目を留めて欲しいと思います。マルコ6:48にこう書いてあります。非常に興味深い記述です。『イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり（漕ぎあぐねている姿を、イエスは見えています。）、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが（ここまでは大体同じです。でもその後を注目して下さい。）、そのままそばを通り過ぎようとおつもりであった。』泡立つ山のような波を堂々とイエス・キリストは歩いて来られるわけですが、まあ弟子たちはその姿を見てイエスとは思わずに、幽霊だと思って怯えきってしまっています。で、イエスはそんな彼らの姿を見ながらも、横目にしながらも、そのまますーっと通り過ぎて、バイバイと言ってその場を後にしようとしたと。面白いですね、イエス・キリストは本当にユーモアのセンスのあるお方ですから、是非皆さんもイエス・キリストは、（もちろん私たちは苦しんでいる姿を見てせせら笑っているのではありません。）ただ嵐の中で、もし私たちがイエスを見るならば、イエスと同じように私たちもユーモアを持つことすら出来ます。その状況を楽しむことすら出来ます。「実にスリリングだ。エキサイティングだ。」目に見えるところによっては、自分たちの常識によっては、経験によっては、もう絶体絶命。でも、このことは主が許された事。このことは主が私に命じられた事、であるならば余裕たっぷりです。「自分にはもうどうにも出来ない。お手上げだ。でも、主は何でも出来るお方。主のなされる事は想像もつかない。」確かに想像もつきません。嵐の湖の真っ暗闇の中を、湖の上のその波の上を、

水の上を歩いてくる。こんな事は全く想像もつかないことですが、そういうことが私たちにも見せられる。そしてそういうことを私たちにも経験させて下さるお方です。実際にペテロという人は、イエスと同じように湖の上をわずかですけれども、何歩かではあります、歩いたことがここに記録されています。イエスだけの体験ではないんです。私たちもペテロと同じように、もしイエス・キリストに目を向けるならば、嵐のただなかで、それは幽霊ではなくてイエスだということを認めて、そしてイエスから目を離さないでイエスの招きに従うならば、あなたもまた湖の上を、到底不可能な事を成すことが出来るということ、覚えて欲しいと思います。でも、残念ながらペテロはイエスから目を離してしまいます。ついつい周りの状況が目に入ってしまって、風を見て怖くなって、そのうちに徐々に徐々に沈み始めました。まあ、これも普通の体験ではありません。皆さんは普通水の上に立とうと思えば、一応トライするかもしれませんが、徐々に沈む事はありません。もう一瞬にして沈んでしまうわけです。でもペテロ場合は湖の上を歩いて、そして段々と沈みかけて。で、その間にペテロは「主よ。助けてください。」と。これは聖書に記録されている一番短い祈りです。「主よ。助けてください。」短い祈りですけれども、それでも主は聞いて下さいます。祈りは長ければ良いというものではありません。短くたっていいんです。ですから、もしあなたが人生の嵐において沈みかけていたならば、一言でいいです。「主よ。助けてください。」と祈ってみて下さい。自分で何とかしようと漕ぎあぐねようとするのではなくて、何とか自分で乗り越えようとするのではなくて、もうどうしようもないと思ったら「主よ。助けてください。」と素直に短くてもいいですから祈って欲しいと思います。イエスはあなたの人生における嵐に、またあなたの人生における最も暗い時間帯に近づいてきて下さいます。しかもあなたが想像もしないような、予期もしないタイミングで、予期もしない形で、イエスはあなたの目の前に現れて下さいます。その時の私たちのリアクションは、どうなるのでしょうか。または、どうなっているのでしょうか。そのことを今日特に取り上げたいと思います。人生嵐の中で、人生の最も暗い時間帯において、あなたが全く予期もしないタイミングで、予期もしない方法で、予期もしない形で、イエスはあなたに近づいてこられます。そして確実にあなたが苦勞して、苦しんで、悩んで、悲しんでいる、そのあなたにご自身を現して下さい。

でも、ここで私たちも弟子たちと同じように、ひょっとしたらそんなイエスの姿をイエスと見ずに幽霊である、何か得体の知れないわけのわからないものだというふうに見て、怯えてしまうかもしれません。イエスを見間違えてしまう、見誤ってしまう、若しくは見失ってしまう。私たちの目が遮られて、それがイエスだと分からなくなってしまいます。気づかない。そういうことが出てしまいますので、今から私たちの目を遮ってしまうもの、イエスが目の前にいるのにそれがイエスだとは分からない、気付かない、見間違ってしまう、見誤ってしまう。そうした障害が5つ今皆さんにご紹介出来ると思います。イエス・キリストを幽霊だと、思わず見間違ってしまう、見誤ってしまう。何がそうさせるのか。イエスの姿を見間違えてしまう、見失ってしまう5つの障害を今から皆さんにお分かちしたいと思います。

その第1番目は、恐れと心配という障害です。あなたの心が恐怖心、心配事、思い煩いで一杯一杯になってしまうと、恐怖・心配があなたのボートに浸水してくると、あなたはパニックを起こします。そしてそんな時に自分に近づいてくる何者かは、本当はイエスなんですけれども、それがイエスだとは気付かずに得体の知れないわけのわからない怖いものだ、幽霊だと思ってしまうことが、あってしまいます。心が恐れと心配でいっぱいになると、イエスが分からなくなってしまいます。で、そういう時に恐れや心配が襲ってきたときに、どうしたらいいのでしょうか。いま主が言われた言葉の順番に是非着目して欲しいと思います。主がそんな時に弟子たちに呼びかけられたんですが、テキストの**マタイの福音書**に今戻って欲しいと思います。**14章**でイエスが何と弟子たちに言われたのか。**27節**を見て下さい。『しかし、イエスはすぐに（これも着目すべきです。すぐにです。）彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。』まあ、イエスが言われた言葉そのものにも注目して欲しいんですが、特に順番に、

順序に目を留めて欲しいと思います。先にイエスは弟子たちに「しっかりしなさい。」と言いました。「しっかりしなさい。」という言葉の直訳は、「元気を出しなさい。」です。で、その後に「わたしだ。」と言いました。ギリシャ語の原文ですとそれは「エゴー・エイミー」と言います。皆さんはもう聞いていると思いますが、「エゴー・エイミー」というのは「わたしはある、というものである。」これは実は聖書の神様の名前でもあります。聖書の神様の名前は、ヤーウェとも言われます。または英語では Jehovah と言ったりもしますが、その名前の由来、これは「わたしはある、というものである。」と。I AM THAT I AM. それで神様の個人名、固有名詞でもあるんですが、イエスは、まさにその神様の名前をここで発しています。「わたしだ。」「エゴー・エイミー」と。「私は主である。」ヤーウェというのが、私たちの使っている聖書では主というふうに太字で旧約聖書中に記されております。まあ、いずれしましても順番は「しっかりしなさい。」その後に「わたしだ。恐れることはない。」です。「わたしだ。しっかりしなさい。」ではありません。先に「しっかりしなさい。」(元気を出しなさい。)そして「わたしだ。」言う順番。この順番が大事です。「元気を出しなさい。」の後に「わたしだ。」の順番です。なぜそんなにそれが重要なのか、意義深いのかと言いますと、ここで**第一テサロニケ 5：16～18**を見て頂きたいと思います。皆さんはよく知っている個所だと思います。暗唱聖句としてもお馴染みです。短いからです。『¹⁶いつも喜んでいなさい。¹⁷絶えず祈りなさい。¹⁸すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。』「いつも喜んでいなさい。」そう出来たらいいなあと思うかもしれませんが、でもこれは命令です。「いや無理ですよ。こんな時に喜ぶなんて。」そこがミソです。そこがポイントです。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。」これも無理難題に思えるかもしれません。で、「すべての事について、感謝しなさい。」これは正確には“すべての事について”と言うよりも、“すべてのことにおいて感謝しなさい。”英語でははっきりと In every thing give thanks. となっています。「すべての事について」と言うところちょっと、英語では“ついて”というのは about になっていますけども、これは In と英語で「〇〇において」すべてにおいて、どんな状況においても、嵐のただ中においても、人生において最も暗い時間帯においても、感謝しなさいと。「これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」と。“望んでおられること”というのは、別の聖書では「これが神の御心です。」と。「神様の御心とは何ですか。」ここにはっきり書いてあります。それは、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事において、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって」神様があなたに望んでおられることで、これが神の御心です。悩む必要はありません。「何が神の御心ですか。どうしたらいいでしょうか。」何をすべきかはここにはっきりと書いてあります。真っ先に「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について若しくはすべてのことにおいて、感謝しなさい。」それから始めればいいわけですから、もしあなたが喜び始め、祈り始め、感謝し始めるならば、つまりしっかりして元気を出し始めるならば、必ずその後に主がご自身を現して下さるということを感じて欲しいと思います。だから順番が大事だと言ったんです。先に「私だ。」という啓示があったのではありません。先に「私だ。」と言って、主がご自身を現したのではありません。その前に「しっかりしなさい。(元気をだしなさい。)」まず先に神様はあなたに勧告をなさいます。「しっかりしなさい。(元気をだしなさい。)」すなわち、『いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。』で、そうしてみると、主はあなたの目の前に現れて「私だ。」と、ご自身を現して下さいます。啓示の前に必ず勧告があります。ですから是非この順番を皆さんも意識して欲しいと思います。幽霊のような実体のないわけのわからない恐ろしいものではなくて、イエスであることに気付きます。もしあなたがしっかりして元気を出すならば、もしあなたが喜び始め、祈り始め、感謝をはじめるならば、イエスはご自身をはっきりと現して下さいます。これまではぼやけて何か漂っているような、何か得体の知れない恐ろしいもののように思っていたものが、ハッキリと「それはイエスだ。」と気付くようになります。イエスは嵐のただ中において、あなたを

転覆させようとするものから、あなたを守って下さいます。あなたを沈めようとするものから、引きずり下ろそうとするものから、海の藻屑とするようなものから、あなたを救い出して下さいます。それはもしかしたら仕事の荒波かもしれません。それはもしかしたら人間関係における暴風雨のようなものかもしれません。でもイエスはそこからあなたを救い出して下さいます。「今月の支払いどうしよう。」または「私の健康において不安です。とんでもない重い病気かもしれない。もう一生治らない病気かもしれない。このままでは死んでしまうかもしれない。どうしよう。愛するものを失ってしまうかもしれない。どうしよう。」慌てて、動揺して、パニックになってしまうかもしれません。でもそのただ中にイエス・キリストは現れて下さいます。そしてあなたに「しっかりしなさい。(元気を出しなさい。)私だ。恐れることはない。」と、個人的に語りかけて下さいます。そしてあなたの嵐をこの方だけが鎮めることが出来ます。弟子たちは目に見えるところによって、すなわち自分たちの常識や経験によっては判断せずに、あくまで主の言われることに、主の言葉に、約束に従いました。それは聖書の言葉に従うことを意味しています。恐れと心配が襲ってきた時に、あなたのやる事は取り乱してパニックすることではありません。そうではなくて信仰によって、この聖書の言葉に従って、これが神の御心だと信じて、「喜ぼう。賛美しよう。感謝しよう。祈ろう。」と。すなわちあなたが霊的にしっかりすること、霊的に元気を出すこと。そうするならば必ず主はあなたの目の前に現れて下さいます。ですから恐れと心配がありますとそれが障害となってあなたの目を遮って、イエスだとはわからなくさせてしまう。幽霊にしか見えないという弊害をもたらします。全部で5つありますから、今1番目をカバーしました。

2番目は、先入観と固定観念という障害です。または独断と偏見と言っても良いと思います。先入観や固定観念が障害となって、イエスが見えない。若しくはイエスを見間違えてしまう。または独断と偏見によって、それがイエスだとは気付かない、見過ごしてしまふ。そういうことがあります。今マタイの福音書を開いているようであれば、13章を見て欲しいと思います。マタイ 13:54~58 です。これが14章につながっていきます。先入観と固定観念という障害、独断と偏見という障害をここに見て欲しいと思います。

『⁵⁴それから、ご自分の郷里に行つて、会堂で人々を教え始められた。すると、彼らは驚いて言った。「この人は、こんな知恵と不思議な力をどこで得たのでしょうか。⁵⁵この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。⁵⁶妹たちもみな私たちといっしょにいるではありませんか。とすると、いったいこの人は、これらのものをどこから得たのでしょうか。」⁵⁷こうして、彼らはイエスにつまずいた。しかし、イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、家族の間だけです。」⁵⁸そして、イエスは、彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの奇蹟をなさらなかった。』で、その後14章に続いていくわけですが、ここで人々はイエスのことを先入観を持って、固定観念を持って、または独断と偏見によって間違った判断をしています。間違った推測をしております。「イエスはただの大工の息子じゃないか。あのマリヤの息子じゃないか。私たちは彼の弟も妹たちも皆知っている。」知っているつもりで判断してしまいます。私たちの傾向はどうでしょうか。勝手な思い込み。イエスと言う名前もこれは実に一般的な名前です。よくある名前です。“イエシュア”とヘブル語では発音します。イエスは非常に一般的なよくある名前です。“イエシュア”これは旧約聖書のヨシュアと同じ名前です。意味は「ヤーウェは救い。主は救い。」という意味で、その辺によくある名前です。「イエスなんかはその辺によくいる人、ただの大工のせがれ、あのマリヤの息子じゃないか。」まあ、勝手な推測、思い込みで、イエスが見えなくなってしまう。すなわちイエスの本当の姿が分からなくなってしまうということですが、イエスはここでは幽霊としてではなくて、あなたのよく知っている人の姿を持って、あなたの目の前に現れて下さいます。イエスは、あなたがよく知っている人、馴染みの人、身近な人を通して、または身近な人のうちにご自身を現して下さる。そのことを覚えて欲しいと思います。よく知っている人が目の前に現れると、私たちの傾向はどうでしょうか。「私はあの人のことをよく知って

いる。小さい頃から幼なじみ、クラスメートです。」とか、よく知っているがゆえに「あんな人の言う事、何の価値もない。聞く耳持たないね。」とか、「あんな人の言う事、妻の言うことなんて。」とか、「普段からなっていないのにこの俺に何を言うつもりか。」と。または「夫の言うことなんて。あんな人はろくに聖書も読んでいないのに、私に何か言う資格なんか無いわ。」と。「あんな人の言うことなんて、私はあんなのことをよく知っているから。まだ半年のベイビークリスチャンに何を言えるか。」と。「私に教えることなんかあるはずがない。」と。「何も分かっていない彼が。何も分かっていない彼女が。」または「子供の言うことなんて聞いてられない。くだらない。いちいちあつてはいられない。どうしてあんな人のあんなことを私がいちいち気を止めなきゃいけないのか。聞かなきゃいけないのか。」と、ついつい私たちはよく知っている人が私たちの目の前に現れて、近づいて何かを言ってくると、よく知っているがゆえに簡単にあしらってしまう。軽率に取り扱ってしまう。時には無視したりすることもあります。よく知っているがゆえに、その人の言うことは何の価値もないと勝手に思い込んでしまいます。でも実際にはイエスはそのようなあなたがよく知っている身近な人を通してあなたに近づいて来られます。そしてあなたに語って下さいます。コンスタントにイエスはあなたのもとに来ているんです。でもあなたはそれに気付かないだけかもしれません。「あんな人の言うことなんて。彼の言うことなんて。彼女の言うことなんて、とても聞けない。何かを私に言う資格など無い。」と、つい思ってしまう。ここで大切な聖句をもう一度皆さんにも聞いて頂きたいと思います。**第二コリント 5:16**。クリスチャンの方は是非この**第二コリント 5:16**を肝に命じて欲しいと思います。『**ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知らうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。**』“人間的な標準でキリストを知る”はちょうど今読んだ**マタイ 13**章のところでは、「あれは大工のせがれじゃないか。あれはマリヤの息子じゃないか。あれの姉妹も姉妹もみんな知っている。」と。イエスを神の子としてではなくて、ヨセフの子またはマリヤの子、人間の子としか見ていません。でも私たちはもはやそのような人間的な標準で、目に見えるところで、自分たちのちっぽけな足りない知識でイエスを知っているではありません。今からは私たちは全く別の基準を持ってイエスのことも見、そしてイエス・キリストを信じる者たちのことも見る必要があります。イエス・キリストを信じる者のうちには、イエス・キリストご自身がその心の内に住んで下さる。そのように聖書は約束しています。ある意味全てのクリスチャンのうちにイエス・キリストが住んでおられますから、すべてのうちにイエス・キリストを見るのが出来ます。でも私たちはクリスチャンを見るときには、なかなかそのようには見ません。むしろ見た目、その人の発言、振る舞い、行動、そうしたところに目を留めて、そうしたところによってその人を判断しようとしています。でも実際にすべてのクリスチャン内には、イエス・キリストが住まわれています。そのことを私たちは現実としてしっかりと受け止めなければいけません。主にある兄弟姉妹、主にあるあなたの夫、あなたの妻。彼らを人間的な標準で見るのではなくて、彼らの内に主ご自身が住んでおられる。そのように彼らを私たちはこれからは見ていかなければなりません。

有名な、よく名の知られている権威のある、例えば牧師だとか、ビリー・グラハムとか、皆さん聞いたことがあると思います。または私の牧師のチャック・スミスなどは、世界的に有名な牧師です。そういう有名な人、権威ある人の言うことならば、私たちはすぐに耳を貸します。「あんな人の言う事だったらきっと合っているだろう。間違いないだろう。正しいだろう。でも特別有名でもない無名の1クリスチャンの言うことなど何の価値もない。この人のことをよく知っている。普段からあんなとんでもないことを言っている、やっている。問題のあるクリスチャンだ。」とか、「あんな人とはどうも反りが合わなくて、クリスチャンだけれどもどうもあんな人とは合わないんだ。生理的に受け付けられないんだ。だからあんな人の言うことなど私はとても聞けない。」として私たちはついつい退けて軽くあしらってしまう。でももしそうした問題だらけのデコボコの不甲斐無いクリスチャンであったとしても、その人の内には完璧な傷のないイエ

ス・キリストが住んでおられると、あなたが見るならば、その人の見方は全く変わると思いますし、その人の言うことも、もっと私たちは違った感覚で受け止めようとする。即ち謙虚になって「ひょっとしたらこの人内に住んでおられる主が私に語っておられるかもしれない。」と、そのように見方が変わると思います。ですからあなたの勝手な推測、先入観、または固定観念、または独断、そして偏見、そうしたものを持ってしまうと、ひょっとしたらその人の内に、あなたの今目の前にいる人の内にイエス・キリストがおられるのに、あなたに個人的に語っておられるのに、それに気付かないで終わってしまうかもしれません。

で、3番目のイエスを見間違えてしまう、見誤ってしまう、見失ってしまうかもしれないその障害として、それは悲劇、不幸。悲劇、不幸という障害があなたの目を遮って、あなたの目を曇らせて、目の前にいるイエス・キリストが見えなくなってしまう。若しくはイエスだと気付かない、見間違ってしまう、そういうことが障害として出てきます。復活の朝、イースターの朝、マグダラのマリヤという女性は、空っぽのイエス・キリストの墓の前に^{たず}佇んで1人泣いていました。ヨハネの福音書 20:15 をお読みしたいと思います。『イエスは彼女（マグダラのマリヤ）に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか教えてください。そうすれば私が引き取ります。』」マグダラのマリヤは、イエスが十字架につけられた時も、その十字架の足元において、そしてイエスが葬られた時も真っ先にイエスの墓に埋葬のために香料や高価なスパイス、ハーブといったものを持って行った、イエスを愛して止まない女性でした。ところが行ってみると墓にはイエスの遺体がない。愛する方、尊敬して、本当にこの方が全てだった、その人の遺体がなくなっているわけです。誰かが墓を開けて荒らして遺体を持って行ってしまった。これ以上のショックはありません。何が起こったのか彼女には全く理解出来ません。そのような全く理解出来ない悲劇、どうしてなのか分からない不幸、その時にあなたを個人的に励まし、慰めてあなたに近づいて来る方、それはもちろんイエス・キリストなんですけれども、マグダラのマリヤにはそれがイエスだとは気付かずに、それはただの園の管理人だと思った。園の管理人というのは、英語では **gardener** (ガーデナー) と言います。 **gardener** と言えば庭師のことですけれども、この園というのは墓があった園です。ですから墓の管理人と言っても良いかもしれません。そのような園の管理人、ガーデナー、お墓の管理人、それはそんなに特別な人ではありません。これもやっぱり普通の人です。イエス・キリストも同じように特別な人の姿をとってではなくて、その辺にいるような人の姿をとって、あなたの目の前に現れて下さいます。マグダラのマリヤからしたら、こんな理解が出来ない悲劇、不幸が自分を襲って、どうしたらいいか分からない。そんな私を助けてくれるのは、そんな私に理解を与えてくれるのは、きっとあの偉大な使徒のペテロやヨハネや、または天から遣わされた天使たちに違いないと。この私に答えを与えてくれるのは、この私に本当の慰め、励ましを与えてくれるのは、偉大な特別な人たちに違いないと彼女は思い込んでいました。ですから目の前にイエスがいても、それはイエスだとは分からずに、彼女はまったくもってイエスが直接自分のもとに近づいて来てくれるとは、想像もしていなかったわけです。期待もしていなかったわけです。ですからここでイエスは直接マリヤに近づいて、マリヤは残念ながらそれがイエスだとは分からずに、園の管理人、ガーデナーだと思ってしまいました。見間違えたわけです。今あなたはひょっとしたら個人的な悲劇、耐え難い不幸に見舞われているかもしれません。「心の中で、もう泣かずにはいられない。」と、「今でも本当は泣きたいぐらいなんです。」というほど苦しい人もこの中にもいるかもしれません。でもイエスはそんなあなたのもとに個人的に近づき、個人的に言葉を掛けて下さいます。そしてあなたはもしかしたらマグダラのマリヤと同じように、きっとペテロやヨハネといったイエスのお弟子さんたち、偉大な信仰者たち、いわゆる聖人と呼ばれるような人たち、または天から遣わされた御使いたち、そんなものが自分に近づき、そんな方が私にきっと何か素晴らしい慰めを、ハッキリとした答えを与えてくれるに違いないと、あなたはそんな期待をして今も待ち続けているかもしれません。でも本当はイエスは最も普通

の身近な人を通して、あなたが全く期待もしていない人を通してあなたに既にお語り下さっているかもしれないんです。もしかしたらあなたは牧師先生とか、または宣教師の人、または伝道者とか、名前の知れた有名な人、カウンセラーといった専門家が、この私の苦しみにきっと何か慰めを与えてくれるに違いない。癒しをもたらしてくれるに違いない。答えを与えてくれるに違いないと、今も期待をしているかもしれません。でもイエスはひょっとしたらあなたの身近にいるごく普通の人を通してご自身を現されるかもしれません。主は昨日私のもとに、これは1つの例外だと思えますけども、特別な人を遣わして下さいました。沖縄から、嵐の中、台風の中、私のためにイエス・キリストがある特別な人を通して、その人は沖縄にあるカルバリーチャペル・バイブルカレッジのディレクターなんですけども、後で紹介しますが、トムさんを通してイエス・キリストは私にご自身を現して下さいました。私はとても昨日の晩は励まされました。一緒にご飯を食べて、妻と一緒に良い時を過ごさせて頂きましたけども、それは私にとっては、特別な、スペシャルな人ですけれども、でも、そういう特別な人ばかりではありません。あなたは本当に身近な人、もう園の管理人、ガーデナー、庭いじりしているおばちゃん、そういう人を通してひょっとしたらイエス・キリストはあなたに近づき、言い知れぬこの悩み、この苦しみ、この悲劇、この不幸、人生の嵐において、あなたに本当に必要な事を語ってくれているのかもしれないんです。是非、あなたが勝手に「この人は何の役にも立ちそうもない。」または「期待出来そうもない。こんな人には何も出来やしないんだ。」とそう思っている人が、もしかしたら意外にもあなたの本当に必要としていることを教えてくれたり、本当に必要なものを与えてくれるかもしれません。そしてイエスはそのような人を通して働かれるお方だということを感じて欲しいと思います。

第4番目に、イエスを見えなくしてしまう、見間違えてしまう障害として、絶望と失望という障害。エマオの途上の2人の弟子の話は皆さんも良く知っていると思います。詳しい事はルカの福音書24:13~32に書いてあります。

〔¹³ちょうどこの日、ふたりの弟子が、エルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。¹⁴そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた。¹⁵話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。¹⁶しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。¹⁷イエスは彼らに言われた。「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。¹⁸クレオパというほうが答えて言った。「エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。」¹⁹イエスが、「どんな事ですか。」と聞かれると、ふたりは答えた。「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。²⁰それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。²¹しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。事実、そればかりでなく、その事があってから三日目になりますが、²²また仲間の女たちが私たちに驚かせました。その女たちは朝早く墓に行ってみましたが、²³イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。²⁴それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。」²⁵するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。²⁶キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」²⁷それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。²⁸彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうなお様子であった。²⁹それで、彼らが、「いっしょにお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから。」と言って無理に願ったので、イエスは彼らといっし

よに泊まるために中にはいられた。³⁰ 彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。³¹ それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。³² そこでふたりは話し合った。「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」』

今は時間の関係上そこは読みませんが、これもやはりイエスが復活した直後のことで、エマオという町に向かう 2 人の無名の弟子がそこに出ています。で、彼らはイエスが復活した事は全く信じていません、分かっていません。マグダラのマリヤと同様にイエスがただ十字架に掛かって死んでしまったとしか思っていない。復活した事実は、この 2 人の弟子はまだ信じていません。すなわち、絶望と失望のただ中にいるということです。でもそんな絶望と失望の中にいる者のところにイエスは、分からない姿でまた近づいて来られます。この 2 人はエマオの途上で、道すがらでイエスに出会ったんです。でも彼らは絶望と失望の中にいたので、それがイエスだとは最初気付きません。でも、道すがら、この人と話をしていると段々彼らの心は変わっていくんですが、実際にこの 2 人の弟子からしたら、通りすがりの人でしかなかった、見知らぬ人だった人。この人が気付いてみたらイエスだと、そう分かる瞬間が来るんです。その分かる瞬間というのは、夕方になって「もっとこの見知らぬ人からの話を聞きたい。この人は聖書を通して、イエス・キリストというお方が十字架につけられ、死んで、葬られて、3 日目に甦るんだ。」という事を解き明かしてくれたわけです。で、彼らはそれを聞いているうちに心が段々燃えてきて、「もっと聞きたい。もっとバイブル・スタディーをこの人から受けて。」と思って、「今晚一緒に泊まってくれませんか。」とお願いするわけです。そして宿で一緒になって、そしてその食事の席で、それはイエスだったんですが、彼らはイエスとは知らずに、その者がパンを裂きました。イエスがパンを裂いたんです。パンを裂くというのは聖餐式のことです。パンを裂いた瞬間に彼らの目が開かれたと、**ルカの 24 章**は記録しています。言い換えれば聖餐式においてパンを裂く時に、私たちの目は開かれます。で、目が開かれて何が見えるかという、私たちは皆一つなんだということが分かります。私たちは皆ひとつの体。教会は一つの体です。そして皆同じ体を頂く者、イエスの肉と血を頂く者。そして皆イエスの尊い罪のない血潮によってすべての罪を洗い清められた者です。ですから「私はあの人の事などあまりよく知らない。たまたま教会で会っただけです。たまたま同じ信仰を持っただけです。」とか、お互いに全然知り合いでもなく、またお互いにはいろいろな違いがある。でも、パンを裂く時には、もうそのような違いは全く問題ではなくなります。

「私たちは 1 つの体なんだ。私たちは同じ体を頂いている。同じ体に与っている。そして同じキリストの血潮によって罪を洗い清められた者だ。」という認識が持てるわけです。それが目が開かれることによって分かります。目が開かれると私たちはそこにイエス・キリストを見ます。そして私たちはそのお方の体であることがその時に、その瞬間に分かります。ですから、もしかしたらあなたはこの中に名前も知らない人、その人の素性もよく分からない。でもクリスチャンだと言う事は分かっている。ひょっとしたら、そういう人があなたに何かを語り、あなたは全く期待をしていなかったかもしれません。むしろ絶望と失望の中において、どうしたらいいか、ただ落ち込んでいるだけで、ただもう鬱状態で、でもそんな見知らぬ人があなたに急に近づいてきて、聖書からねんごろにイエス・キリストがどういう方か、教えてくれる。そして聖餐式のテーブルに与った時に初めて気付くことがあるかもしれません。

で、最後に 5 番目ですけれども、イエスの姿が見えなくなってしまう、目の前にいるのに見間違えてしまったり、見誤ってしまう、見失ってしまう。その障害として、それは不従順と自負心という障害です。これについては**ヨハネ 21 章**を是非読んで欲しいと思います。これもメモだけして後で箇所を開いて確認をして欲しいと思います。やはりイエスが復活された後の話です。イエスは弟子たちに生前にガリラヤに行くように、と命じておられました。そのことは再三再四語っておられました。**マタイの福音書 26 : 32** そこをお読みします。『しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。』

とイエスがすでに十字架につけられる前に、これは最後の晩餐の席で、弟子たちに語っておられたんです。

で、**マタイの福音書 28 : 7** これは復活後の話です。『ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いできるということです。では、これだけはお伝えしました。』これは復活の朝、天使が埋葬に来た女性たちに語った言葉です。「イエスは甦った。そして弟子たちよりも先にガリラヤに行っているんだ。これをメッセージとして弟子たちに伝えて欲しい。」と御使いは言いました。

で、**10 節**のところも今度は復活のイエスが直接言われています。『すると、イエスは言われた。「恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。』と。何度も何度もガリラヤに行けば復活したイエス・キリストと弟子たちは会うことができるんだということ。これはもう確約されていたわけです。イエスは間違いなく先にガリラヤに行っているということです。ですから、この言葉に従って弟子たちはガリラヤに先に行ったイエスを見つけるまで探すべきでありました。見つかるまでといっても方々を探し回るという意味ではありません。というのは、この前復活の主はエルサレムですすでに彼らの目の前に現れています。彼らはイエスを探していたわけではありません。彼らは家の中に閉じこもっていました。もしかしたら自分もイエスの弟子として捕えられて十字架につけられてしまうかもしれない。怯えていたわけです。でも、そんな怯えていた彼らの真ん中にイエスは復活した姿を現されました。ですから、ガリラヤに行けば、とりあえずイエスが見つけてくれる。これを期待出来たはずです。イエスの方から近づいて来て下さる。それを彼らは信じる事が出来たはずです。にもかかわらず、**ヨハネの 21 章**を見ると弟子たちは確かにガリラヤに行くんですけども、イエスを待つ、イエスを探すという事は一切せずに、「ただ何もせずに待っているだけでは罫があかない。」そう考えて彼らは、ガリラヤ湖の方に行ってしまったわけです。実際に**マタイ 28 : 16** というところでは、『しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。』とあります。これは“**イエスの指示された山**”とありますから、イエスは予てからガリラヤと言っても、ガリラヤ湖ではなくて、ガリラヤの山に行きなさいと。そこでわたしに会うんだということを常に言ってあって、ガリラヤの山で会うことを予定としていたにもかかわらず、弟子たちはガリラヤの山ではなくて、ガリラヤの湖の方に行ってしまったわけです。なぜでしょうか。ガリラヤ湖というのは弟子たちにとって故郷でもあり、それは古い職場でもあり、古いライフスタイルでもありました。イエスに出会う前の古い話です。彼らは自分たちの仕事道具、漁師でありましたから船や網といったもの、全て捨ててイエスに付き従って行ったわけです。一度捨てたはずの生活に彼らは、もう一度戻ろうとしております。これは弟子たちの中では、「イエス無しでもやっていけるんだ。」という自負心、プライドが潜んでいることが現れております。まだ「自分の経験、自分の能力、自分の技術で充分やっていけるんだ。」という自負が彼らの中にあっただということがこの記事からも分かります。イエスの言葉に反して、自分の腕を頼りについ行動に出てしまった。イエスの言葉に従わないで、自分の思い付き、自分のアイデア、自分の力で何かを始めようとしたわけです。でもこの**ヨハネの 21 章**を読むと分かりますように、その自分の思い付きで始めた事は、必ず徒勞に終わっています。何にも魚は捕れませんでした。1 匹も釣れなかったんです。そして忙しくて、疲れていて、目の前に、岸边にはイエスが立っているのですが、彼らはそれには気付きません。声もかけられるんですが、それがイエスだと分からなくなってしまいます。彼らにしてみれば、岸边に立っているのは全くの部外者としか映らなかったわけです。

このように最初からもう一度振り返って、最後までまとめていきたいと思いますが、イエスが目の前にいるのに、イエスがあなたに親しく語って下さっているのに、あなたはそれがイエスだとは気付かない。場合によっては幽霊のような得体の知れないもの、場合によっては「こんな人の言うことなんて。」全く気付かない。そうした障害、イエスが見えなくなってしまう、見間違ってしまう障害として、全部で 5 つ挙げて

きました。1 つは恐れと心配。そして先入観と固定観念。そしてまたは独断と偏見。または悲劇、不幸。または絶望と失望。そして不従順と自負心。こうしたものが障害となって、イエスが目の前にいるのにイエスが分からない、見えない、それが全く別のものに見えてしまう、イエスだと気付かないということが出てしまう、障害だと言いました。でも、もしあなたが人生の嵐の真っ只中において、イエスの御名を褒め称えて、喜びをもって、祈りをもって、感謝をもって、イエスを賛美して、いま直面している困難を受け止めて、そして必ず主が自分の目の前に現れて下さるんだと、信仰を持って受け止めるならば、必ずあなたの目の前にイエス・キリストは本当の姿を現して下さい。現実の方であることをハッキリとあなたに見せて下さいます。「嵐を鎮めることが出来るのは、私だけだ。」とハッキリとあなたに教えてくれます。もし、あなたが自分がよく知っている人の言葉を、これを主からの言葉であると謙虚に受け止めて、そして真摯に受け止めるならば、あなたは必ずその人の内にイエス・キリストの姿を見出すことが出来ると思います。また、もしあなたが使徒たちや、天使たちや、牧師や、宣教師や、伝道者、専門家のカウンセラーという人たち以外で、園の管理人のような本当に普通の人、そうした人たちの言う事にも耳を傾けるならば、やはりあなたはいち早くイエス・キリストに出会うことが出来ると思います。またはあなたが同じ道を行く人、それはあなたがあまりよく知らない見知らぬ人かもしれませんが、その人と一緒に歩いてバイブル・スタディーに参加して、そして一緒にパンを裂くならば、聖餐式に与るならば、あなたはやはり目が開かれて、イエスの顔を見ることが出来るようになると思います。もう全てが徒労に終わったとき、もしあなたが突然現れた岸辺の部外者からアドバイスを受けて、それをあなたが聞き入れるならば、あなたは必ず「それは主です。」と気づいて、そしてあなたの救い主に出会うことが出来ると思います。すべては予期せぬタイミング、予期せぬ方法、予期せぬ形、または予期せぬ人を通して主は意外な形であなたの目の前に現れて下さる。想像も出来ないような時、全くイメージ出来ない、全く期待も出来ない、そういう時に主はあなたの目の前に現れて下さいます。あなたはその方を待ち望めば、それでいいんです。必ず主があなたの目の前に現れて、そして必ずあなたに声をかけ、そして必ずあなたの嵐を鎮めてくれます。他のものはむなしばかりです。湖の上を歩くなんていうことは、普通の人には出来ません。目に見える人間を頼りにしている限りは、きっと期待を外され、裏切られて、その人の無力さ、そうしたものにあなたは失望する、幻滅するかもしれません。でも、イエス・キリストという方は、ただの人間ではありません。一般的にはイエス・キリストはキリスト教の開祖、宗教家、道徳の教師だとしか見られておりませんが、でも本当のイエスの姿は、ただの宗教家ではありません。キリスト教の開祖でもありません。イエス・キリストはキリスト教の神、そのお方であります。この方はあなたの人生の嵐を鎮めることが出来ます。文字通りの嵐ですら鎮めることが出来るんです。台風が近づいてこようとも、大地震があろうとも、自分の経営している会社が倒産してしまったとしても。「もう家庭が崩壊してしまう。もうどうにもならない。お先真っ暗だ。」そういう時もイエスは近づいてきて、そして「**しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。**」と、きっとあなたにご自身を現して下さいから、その前にこうした5つの障害を今は皆さん心の中で一つ一つ検証してみてください。あなたが今嵐のただ中でイエスを見る事が出来ないのはなぜなのか。ひょっとしたらこの5つのどれかの障害が、もしかしたら5つとも自分の障害となっている。自分は全く見えていなかったんだと言って、今素直に主の御前に悔い改めをして、告白をして、そして「どうかこの障害を取り除いて下さい。そして、あなたを見えるようにして下さい。」と、祈って欲しいと思います。そうすればあなたの人生の嵐は、今この瞬間にでも鎮めて頂くことが出来ます。では、今日はこれで終わりたいと思いますので、最後皆さんと一緒に祈って終わりたいと思います。